

文学史からみる清代「性霊派」の成立：趙翼「（開生面）生面を開く」の解釈をめぐって

汪, 洋
九州大学中国文学講座：専門研究員

<https://doi.org/10.15017/7405118>

出版情報：中国文学論集. 54, pp.49-66, 2025-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



文学史からみる清代「性靈派」の成立

——趙翼「(開生面) 生面を開く」の解釈をめぐって

汪 洋

はじめに

趙翼(一七二七—一八一四)、字は雲松、号は甌北。文学史においては、常に袁枚(一七六一—一七九八)と並び称され、清代の「性靈派」を代表すると位置づけられている。これまでの研究も、袁枚と趙翼の並称という事実に関する考証を主として行ってきたもので、その並称を支えた文学史的基盤、即ち両者がいかに互いの創作を促進し、いかに影響を周辺に及ぼしたのかという具体的な状況については、十分に検討されてこなかった。⁽¹⁾

そこで、本稿では、これまでの性靈派や清代詩歌史の著作において、趙翼を論じる際にしばしば引用された「開生面(生面を開く)」という一語に注目したい。例えば、王英志『性靈派研究』には、「生面を果然として一代に開き、古人元より千秋を占めず」というのは、袁枚が趙翼の詩集にみられる独特の文学精神に対して感嘆を禁じ得なかったことを示している」とある。⁽²⁾ また朱則傑『清詩史』にも、「趙翼の詩は性靈を表し、自由で独創的である。このよきな文学精神は袁枚と一致し、彼自身の詩説にも通じている。この点こそ、まさに袁枚が生面を果然として一代に開き、古人元より千秋を占めずと述べた通りである」と書かれている。⁽³⁾ つまり、「生面果然開一代(生面を果然として一代に開く)」という一句は、趙翼の作品が独創的であることを示す表現として解釈され、その「性靈説」を体現する文学精神を示す語として捉えられてきた。

この一句の出所を求めると、それは乾隆四十四年(一七七九)に、趙翼と袁枚が初めて会面した際、袁枚が趙翼

文学史からみる清代「性靈派」の成立

の新村『甌北集』二十四卷に題した詩「謝趙松觀察見訪湖上兼題其所著甌北集二首」其二（『小倉山房詩集』卷二十六、『袁枚全集新編』所収、浙江古籍出版社、二〇一八年）に見出される。その時、袁枚は六十一歳、趙翼は五十三歳であった。さらに、両者のこれまでの経歴を比較すると、袁枚は、乾隆三年（一七三八）に進士及第し、庶吉士に拔擢され、乾隆七年（一七四二）に卒業試験の満州語科に不合格となり、江蘇省溧水県知県に任ぜられ、乾隆十三年（一七四八）に退官して南京に隨園を構え、以後、在野の郷紳かつ詩人として活躍した。これに対して、趙翼は、乾隆二十六年（一七六一）に進士及第し、庶吉士に拔擢され、乾隆三十一年（一七六六）に広西省鎮安府知府に任じられ、その後、乾隆三十八年（一七七三）に「乞養」（親孝行のための一時的な退官）を申請して故郷の常州に戻る。この時すでに、彼は江南地域を二十年以上離れていたことになる。この対比から明らかのように、袁枚は、科挙社会においても江南詩壇においても、趙翼より二十年以上早く、かつ長く活躍していたことがわかる。それがために、「生面を果然として一代に開く」という一句は、単なる文学的賛辞ではなく、袁枚による趙翼及びその作品の現実的な位置づけを含意したものであると考えられる。

一方、この一句の中核をなす「生面を開く」という一語は、すでに乾隆三十一年（一七六六）、趙翼自作「奉命出守鎮安歲杪出都便道歸省途次紀恩感遇之作十二首」其八（『甌北集』卷十三、上海古籍出版社、一九九七年）に見られる。広西鎮安府赴任時の同詩で、趙翼は「天教詩境開生面、人少題篇在上頭（天詩境をして生面を開かしめ、人題篇上頭に在る少なし）」と詠じ、これまで描かれることの少なかった広西の風土を表現しようとする意識を示している。と解釈される。これらの連作は、趙翼が人生の転機に詠んだ力作として、現行の『甌北集』五十三巻本において、卷十三の冒頭に配列されている。『甌北集』は年代順に編纂された詩集であるため、袁枚が読んだ二十四巻本においても、同様の位置に収められていたと推定される。袁枚に看過しがたい作品であったと思われる。したがって、袁枚の「生面を開く」には、趙翼の用例を知ったものの、趙翼を「性靈派」詩人として位置づけたという異なる解釈が見られる。本論は、「生面を開く」に関する資料の読解を通じ、同語をめぐる趙翼と袁枚の解釈の異同を明らかにし、趙翼を取り巻く創作の場がいかに変換したか、さらに文学史的視座から「性靈派」がいかに成立したかという問題を検討するものである。

一、「生面を開く」という一語の解釈について

まず、「生面を開く」という一語について、その語源と明清時代における用例を俯瞰したい。この語の語源は、杜甫の名作「丹青引」（『杜詩詳注』巻十三、中華書局、一九七九年）にあり、「凌煙功臣少顔色、將軍下筆開生面（凌煙の功臣顔色少なし、將軍筆を下して生面を開く）」と詠じられている。この二句の意義について、宋代の趙次公注では、「凌煙画像顔色已暗、而曹將軍重為之画。故云開生面（凌煙の画像、顔色已に暗く、而うして曹將軍重ねて之の為に画く。故に生面を開くと云う）」と解釈されたように、古い画像を改めて彩を施したことを指している。明の唐汝詢『唐詩解』や清の仇兆鰲『杜詩詳注』などの注釈書も、同様の解釈を取っている。特に、明の「公安派」の袁中道には、「題碑猶未燥、種柳已成行。山水開生面、亭台宿異香（碑に題し猶ほ未だ燥かず、柳を種え已に行と成る。山水に生面を開き、亭台に異香を宿す）」（『珂雪齋前集』巻七、偉文圖書出版社、一九七六年）という用例が見られる。これは、碑文や柳が山水を彩つたことを意味している。「公安派」は、清代の「性靈派」の先蹤とされるが、彼らもまた「生面を開く」という一語を杜甫詩の解釈として用いていた。

次に、順治九年（一六五二）刊行の錢謙益（一五八二—一六六四）『列朝詩集』（中華書局、二〇〇七年）に、「西涯一派、煥然復開生面（西涯一派、煥然として復た生面を開く）」（丙集「李少師東陽」）という用例が見られる。その背景には、李夢陽が模倣を方法論とする「格調説」を提唱し、いわゆる「茶陵派」の長として詩壇を君臨し、西涯を号とした李東陽を排撃した結果、李東陽を尊ぶ詩人がほとんどなくなったという事情がある。これに対して、程嘉燧は、李東陽の作品を再解釈し、その真面目を指摘した。すると、この用例も、李東陽の詩歌に彩を施したことを意味している。ところが、先の引用文の後には、李東陽詩の真面目について「其詩有少陵、有隨州、香山、有眉山、道園、而其為西涯者自在（其の詩に少陵有り、隨州、香山有り、眉山、道園有り、而るに其れ西涯たる者自ら有り）」（同前）という論述が見られる。李東陽の作品には、杜甫や劉長卿たちに似ている作風もあったが、同時に彼自身の独自性もあった。換言すれば、その作品には、作者の個性が表れていたのである。このように、錢謙益は、「模倣論」に反対する立場から、「生面を開く」という一語に、特定の方向性を付与した。

これ以降、詩歌批評の中には、錢謙益の解釈を踏まえた用例が多く見られるようになった。康熙四十一年（一七〇二）成立の朱彝尊（一六二九—一七〇九）『明詩綜』（中華書局、二〇〇七年）卷十二「李暉」には、李暉の作詩について、「有草閣集。草閣得詩法於李季和（筆者注、李孝光）。然季和猶為廉夫（筆者注、楊維禎）薰染、草閣歌行則一氣孤行、獨開生面（草閣集有り。草閣は詩法を李季和より得。然るに季和猶ほ廉夫に薰染せられ、草閣歌行ならば則ち一氣にして孤行し、独り生面を開く）」と論じられている。楊維禎は「鉄雅体」樂府・歌行で名高かったが、ここで李暉の歌行はこれを踏襲せず、自らの個性を備えていたことが強調されている。

乾隆時期になると、厲鶚（一六九二—一七五二）は、その「查蓮坡蔗塘未定稿序」（『樊榭山房集』「文集」卷三、上海古籍出版社、一九九二年）において、当代の無学な詩人に対して、「或襲一二鉅公之遺貌而未開生面（或ひと二の鉅公の遺貌を襲ひ而るに未だ生面を開かず）」と非難した。大作家を踏襲するだけでは、「生面を開く」ことができないとされたのである。厲鶚自身は、乾隆元年（一七三六）の博学鴻詞科に^⑤応募せず、在野で終身した。彼は朱彝尊の後を受け、「浙派」を代表する詩人の一人と数えられている。また序文に見える查蓮坡は、天津で水西荘を構えた查為仁を指す。彼は郷紳であり蔵書家・詩人でもあり、財力によって文士たちの活動を支援し、清代北方の「性靈説」という文学精神を持つ詩人と評価されている。^⑥

朱彝尊らに対して、模倣を方法論とした「格調説」を唱えた沈德潜（一六七三—一七六九）は、乾隆二十六年（一七六一）に帝の勅命によって修訂された『清詩別裁』（上海古籍出版社、一九八四年）卷二十四「黃之雋」の中で、「唐堂学殖富有、而心思才力又足以驅策之、故能自開生面、仍復不失正軌（唐堂学殖富有なり、而うして心思と才力又た以て之を駆策するに足り、故に能く自ら生面を開き、仍復た正軌を失はず）」と論じている。ここで沈德潜は個性の表現と古典の法則が必ずしも対立するものではないという見解を示している。黄之雋は、乾隆元年（一七三六）の博学鴻詞科推薦受験者の一人で、朱子学に通じつつ、杜甫の詩句を利用し艶詩集『香屑集』を編んだ。沈德潜は、折衷的な立場から「生面を開く」という一語を用いている。また袁枚と趙翼と並称される蒋士銓（一七二五—一七八五）は、乾隆二十七（一七六二）に師である金德瑛が彼のために作った「忠雅堂集序文」（邵海清・李夢生『忠雅堂集校箋』附録「序跋」、上海古籍出版社、一九九三年）において、「所言皆發諸性分、而用古人法律、不務剽

襲雷同、錚然別開生面（言ふ所は皆諸に性分より発し、而うして古人の法律を用ひ、剿襲雷同を務めず、錚然として別に生面を開く）」と評されている。ここで金徳瑛は、蔣士銓が古典に則りつつも自らの個性を表現していること表彰している。金徳瑛自身は、乾隆元年に状元及第し、官僚としての面影が濃い文人であったが、踏襲の弊を批判しつつ、古典規則の遵守と個性の表現とを両立させようとする折衷的な立場を取ったことが窺える。

以上の考察から明らかなように、乾隆時期に至ると、「生面を開く」という一語は、個性を表現したという解釈で、詩人たちに肯定的に受け入れられていた。すると、この語は、必ずしも「性霊派」特有の表現ではなく、さらに語り手の身分や立場によって、具体的な意味合いも変わることが読み取られる。それを換言すれば、趙翼の「生面を開く」という一語についても、用例ごとにその意味と背景を、詳細に分析する必要があると考えられる。

二、趙翼の「生面を開く」とその系譜について

さて、趙翼の「奉命出守鎮安歲杪出都便道歸省途次紀恩感遇之作十二首」其八を読解してみよ。

株守頻年想壯遊 從今景物豁吟眸 株守 頻年 壯遊を想ひ、今より 景物 吟眸を豁けしむ。

天教詩境開生面 人少題篇在上頭 天 詩境をして生面を開かしめ、人 題篇 上頭に在ること少なし。

風雪滿天慶兩鬢 江山万里入孤舟 風雪 天に満ちて 兩鬢に慶しく、江山 万里 孤舟に入る。

平生曾詔登高賦 可有驚人好句留 平生曾て登高して賦するを詔り、人を驚かす好句を留むる有るべけんや。

乾隆三十一年、翰林院編修であった趙翼は、広西省鎮安府知府に昇進した。乾隆十四年以降、十八年間過ごした北京での生活を終え、清王朝西南部の鎮安府へ赴任することになった。赴任に先立ち、彼はまず故郷の常州に戻り、母を住まわせ、長男の骸骨を葬った。ここでの十二首の連作は、常州に向かう途中で作られたものである。前掲の第八首では、趙翼が今後の広西での作詩の展望を示している。

第一句目の「壯遊」は、杜甫の「壯遊」詩を典故としたものと思われる。「壯遊」では、杜甫が少年期にすでに詩才に富んでおり、呉越地方を旅してその景色を遍歴したことを回想している。「王謝風流遠、闔廬丘墓荒。劍池石壁

灰、長洲荷菱香（王謝風流遠く、闔廬丘墓荒る。劍池は石壁仄き、長洲は荷菱香し）（『杜詩詳注』卷十六）と詠じたように、旅先の景色を詳しく描いている。趙翼は杜甫に習い、広西省の景色を詠じようとした雄心が見られる。第三句目の「詩境」という語彙については、白居易の「閑中得詩境、此境幽難說。露荷珠自傾、風竹玉相憂（閑中に詩境を得、此の境幽にして説き難し。露荷珠自ら傾き、風竹玉相ひ憂す）」（『秋池二首』其二、謝思焯「白居易詩集校注』卷二十二、中華書局、二〇〇六年）という詩句があり、露の珠と竹の音が、幽遠の「詩境」を喚起すると書かれている。つまり、「詩境」は、詩を作る心境や詩情を引き起こす雰囲気と解釈できる。同様に、查慎行の「江豚忽掉尾、散作鱗箇箇。豁然關詩境、遠景開淡池（江豚忽ち掉尾し、散りて作す鱗箇箇たり。豁然として詩境を開き、遠景淡池として開く）」（『晚出荻港』、『敬業堂詩集』卷一、上海古籍出版社、二〇一五年）という用例も、江豚の尾の動きが詩情を喚起することと捉えられる。查慎行は、趙翼が崇敬した詩人である。よって、趙翼の「詩境」という表現も同様であったと考えられる。結論として、「天詩境をして生面を開かしむ」という一句は、広西の景色が作詩の心境を引き起こす、と解釈されるのが、正確である。

当時の詩人にとって、この解釈は、誤解を招くものではなかった。なぜなら、錢大昕が趙翼の広西赴任に際して贈った詩にも、同じ趣旨かつ同じ表現が見られる。「臘月衝寒去、長途叱馭艱。天教詩境拓、飽看粵西山（臘月に寒を衝きて去り、長途に馭を叱りて艱む。天詩境をして拓き、飽くまで粵西の山を看しむ）」（『送趙雲松太守出守鎮安二首』其一、『潛研堂集』詩集卷八、上海古籍出版社、一九八九年）と詠じられたように、趙翼が寒い時期に遠い任地へ赴くという困難な旅路を描く一方で、その旅が粵西の山々を十二分に觀賞し、作詩の心境を喚起する契機であることを伝えている。錢大昕は、乾隆十九年（一七五四）に進士及第し、同年、趙翼は明通榜（進士試験の副榜）に合格した。二人は、科挙時代に同年であり、その後も相次いで翰林院に入って同僚となった。錢大昕が趙翼への送別詩を作った時点で、彼は翰林院侍読学士に任じられており、趙翼は翰林院編修から鎮安府知府に抜擢された。つまり、両者は翰林院という創作の場を共有していたことが窺える。すると、趙翼詩と錢大昕詩に見られる表現上の類似は、一方が他方を模倣した結果ではなく、むしろ翰林院官僚たちが共有する意識に基づくものと考えられる。この点は、翰林院編修の王文治が雲南省臨安府へ赴任した際に、趙翼が贈った「送王夢樓侍読出守臨安」（『甌北集』

卷十)にも裏付けられる。この作品の中に、次のような表現が見られる。

猓花如女顔姪姪 猓鳥喚人声格磔 猓花 女の如く 顔は姪姪たり、猓鳥 人を喚び 声は格磔たり。⁹⁾

自古未曾有品題 一經剪裁逾奇僻 古より未だ曾て品題せらるる有らず、一たび剪裁を経れば遂々奇僻とす。

風氣將開不自顯 似天留待詞人闢 風氣將に開かんとして自ら顯はれず、天詞人を留待して闢かしむるが似し。

引用された部分では、第一句の「猓花」と第二句の「猓鳥」が、異民族が住む地域の動植物に対する汎称として用いられている。その用例は、管見の限り、査慎行の「蛮花非時開、猓鳥乱格磔(蛮花時に非ざるも開き、猓鳥乱れに格磔とす)」「(老僕東帰寄慰德尹兼示潤木)、『敬業堂詩集』卷三」が最初のものでして挙げられる。これは、査慎行が康熙期の「三藩の乱」の期間に、従軍文人として西南部に赴いていた際に詠じられたものである。したがって、「猓花」や「猓鳥」といった景物は、趙翼にとつて清初以来あまり詠まれてこなかった題材であったといえる。王文治の作詩によって、そのありかたが次第に示されてゆくこととなる。この送別詩には「生面を開く」や「詩境」などの語は直接に用いられないが、その趣旨は前述の趙翼と錢大昕の作品と重なることが確認される。

このような趣旨は、翰林院関係の官僚たち、或いは学者官僚たちの作品に広く見られる。裘曰修(一七一二—七七三)は、乾隆四年(一七三九)に進士及第し、庶吉士に拔擢され、翰林院編修を経て幾度も昇進し南書房(天子の書齋)行走に命じられた。趙翼らの先輩にあたる彼は、乾隆八年(一七四三)に広西省柳州府知府に赴任する陶士儂を送別する際、「江山如此筆力健、藉爾欲吐胸中奇(江山は此くの如し筆力も健く、爾を藉りて胸の中の奇を吐かんと欲す)」「(裘文達公集)詩集卷七、『続修四庫全書』所収、上海古籍出版社、二〇〇二年)と詠じ、柳州の山水が、陶士儂の作詩の契機となることを述べた。また劉嗣綰(一七六二—一八二一)は、駢儷文作家で、嘉慶十三年(一八〇八)に進士及第し翰林院編修となった。彼は嘉慶十八年(一八一三)に宋湘が雲南省曲靖府へ赴任する際、「君行不独誇詩格、蒙段山河亦生色(君が行く独り詩格を誇らず、蒙段の山河亦た色を生ず)」「(尚綱堂集)詩集卷四十六。同前)と詠じた。「蒙段」は、かつて雲南を支配した蒙一族と段一族を指し、「色を生ず」は、「生面を開く」と同義に解釈できる。さらに翰林院出身の梁章鉅(一七七五—一八四九)は、道光十五年(一八三五)に甘肅布政使赴任の際、「辺政藉練習、詩境資蒼涼(辺政を練習に藉し、詩境を蒼涼に資く)」「(退庵詩存)卷二十五。

文学史からみる清代「性霊派」の成立

同前)と詠じ、荒涼な景色が作詩の契機となることを期待した。最後に清末の袁昶(一八四六一一九〇〇)も同様に、主和派の大臣として「庚子事変」で最期を遂げた彼が、駐ロシア公使の許景澄への答詩で、「智囊横括西紅海、詩境雄開北鬱洲(智囊横たはりて西紅海を括り、詩境雄んに北鬱洲に開かる)」「(于湖小集)卷一。同前)と詠じた。ここでの北鬱洲は、自注によれば、北鬱単越洲を指し、現在「北俱盧洲」と通称される仏教における北方の大陸である。ロシアの景色が雄大な詩情を引き起こすと述べた。

したがって、「生面を開く」という表現には、中央官僚たちが、遠隔地や未知の風景を体験して作詩の契機を得る、という共通意識が認められる。ゆえに、趙翼の「生面を開く」という用例も、作詩に個性を表現したことを意味するものとは異なると考えられる。

三、趙翼の広西詩とその評価について

ここで、趙翼の広西詩のうちの一作を取り上げ、「生面を開く」と期待された作品は、具体的にいかなる内容をもつものであったかを検討したい。先述の通り、趙翼は、乾隆三十一年に広西省鎮安府知府に任じられた後、まず故郷の常州に帰省した。翌年、揚子江を遡って浙江・江西・湖南を経由し、広西に入った。その途次、桂林府を訪れて名勝の陽朔山を眺めてこの景色を題材として七言古詩「陽朔山」(『甌北集』卷十三)を作った。以下、紙幅の都合上、同詩の一部のみを引用する。(句数番号は筆者による)

23 肖形想各有名字 24 不暇一一詢土諺 形を肖り各々名字有りと思ふも、一々にして土諺に詢ぬる暇あらず。

25 但覺無數青螺螭 但だ覺ゆるに無數の青螺螭、

26 撒來倒挿江岸遍 撒き來たりて倒さまに江岸に挿して遍くす、と。

27 又疑機括発地弩 又た疑ふらくは機括地弩より発し、

28 仰空激射千枝万枝箭 空を仰ぎて千枝万枝の箭を激射す、と。

29 惜哉劍南樵客井西道人俱未到 惜しきかな 劍南樵客と井西道人俱に未だ到らず、

30 誰写奇峭入素絹

誰か奇峭を写して素絹に入る。

31 胡為世眼無定準

胡為ぞ世眼定準無く、憎む者詆諆し愛する者羨む。

33 談不容口楊侍郎

談りて口に容れざるは楊侍郎、官に除せられ南に來たり榮選を託る。

35 或言兩頭之蛇千仞翼

或ひは 兩頭の蛇あり千仞の翼あり、

36 一錢不值人所賤

一錢に値せず 人賤しまるる所と言ふ。

37 我為平心主公論

我為に平心にして 公論を主じ、銖両を黙較し厳しく最殿す。

39 蘊藉殊少雅人致

蘊藉 殊に雅人の致に少なく、刻削 亦た高士の狷に類す。

41 石不能言応點頭

石言ふこと能はず 応に點頭すべく、真面 匡盧乃ち全て現はる。

第1句から第22句までの、赴任経緯及び陽朔の山々に対する個別描写は省略する。引用部分では、タニシ、または矢のように、空へ向かつて鋭く聳える群峰の全体的な様子が描かれている。第29句の「劍南樵客」は、北宋の画家趙昌を指す。彼は花卉画に長じ、蘇軾が「趙昌四季・躑躅」(『蘇軾詩集』卷四十四、中華書局、一九八二年)に、「開卷便知歸路近、劍南樵客為施丹」(卷を開けば便ち歸路の近きを知り、劍南樵客為に丹を施す)と詠じたように、楚山の岩間に咲く躑躅(筆者注、ホトトギス)を描き、蘇軾に四川への郷愁を喚起させた。しかし、趙昌は陽朔の山を描く機会がなかったため、蘇軾もこれを題詠することはなかった。同句の「井西道人」は元の画家黄公望の号である。この号を詩語として初めて用いたのは、管見の限り、査慎行の「井西道人画不得(井西道人画くも得ず)」という表現である。また査慎行は、五言古詩「陽朔郡」(『敬業堂詩集』卷四十八)に、「不作一錢值、斯言母已太。聖朝懷遠人、吏職視殿最(一錢の値も作らず、斯の言已に太だしからざらんや。聖朝遠人を懷き、吏職殿最を視る)」と詠じ、かつて流謫地とされた陽朔が今や朝廷の関心を受け、長官の政績が積極的に評判されるようになったことを讃えた。しかし、査慎行も陽朔の景観そのものを題材として描くことはなかった。趙翼が蘇軾と査慎行に挑もうとした意欲は、この陽朔山の光景によって触発されたであったと考えられる。このことは、趙翼「陽朔山」における両者への明確な意識にも裏付けられる。第33・第34句の「楊侍郎」については、『北夢瑣言』(上海古籍出版社、一九八一年)巻五に、州県官の楊蓮がかつて広西の陽朔・荔浦を訪れ、歸朝後、侍郎の王賛にその美景を絶賛し、

赴任を望んだという逸話が見える。趙翼が州県官の楊邊を誤って楊侍郎としたのは、彼が查慎行の「題費曉城同年牧牛図」自注に引用された『北夢瑣言』の断片的なテキストを読んだためだと思われる。¹¹これに続く第34・第35句は、蘇軾「次韻和王鞏六首」其一の「君談陽朔山、不作一錢直。岩藏兩頭虺、瘴落千仞翼（君陽朔の山を談るに、一錢の直も作らず。岩に両頭の虺を蔵し、瘴千仞の翼を落とす、と）」（『蘇軾詩集』卷二十七）を引用している。すると、第37句以降では、趙翼が蘇軾と查慎行の賛否を踏まえ、自分の見解を示し定説を立てようとしている点が注目される。第38句「嚴しく最殿す」は、嚴格に順位を定める意味で、查慎行の「吏職殿最を視る」の「殿最」を押韻の為に倒置したものである。すなわち、趙翼は蘇軾と查慎行を超えて、陽朔の山のありかたを改めて描いた。これは、趙翼にとって、新たな「詩境」であった。

また「樹海歌」（『甌北集』卷十三）には、広西省と雲南省の境界に位置する下雷州の原生林について、「我行万里半天下、中原尺土皆耕稼。到此奇觀得未曾、榆塞鄧林詎足亜（我万里を行きて天下に半し、中原尺土も皆耕稼せらる。此に到り奇觀未だ曾て得ず、榆塞鄧林詎に亜ぐに足らんや）」と書かれている。ここでは、すでに開発の進んだ中原の土地に対して、下雷州の原生林が、伝説上の榆塞や鄧林にも劣らぬほど存在していると述べている。この四句は、蘇軾の「身行万里半天下（身万里を行きて天下に半す）」（『龜山』、『蘇軾詩集』卷十八）及び查慎行の「聳身側足狂叫絶、生平奇境得未曾。三湘七沢旧雖到、却溯洲渚塞孤芳（身を聳て足を側め狂く叫絶し、生平奇境未だ嘗て得ず。三湘七沢旧到ると雖も、却つて洲渚を溯り孤芳を攀る）」（『漢瞻自洞庭先歸詩以志別即次見贈旧韻』、『敬業堂詩集』卷四十八）という両者の表現を組み合わせたものである。查慎行の詩は、康熙二十九年（一六九〇）に、彼が蘇州の洞庭山に設けられた『清一統志』編纂局に勤務していた際、同僚の張雲章の離任を送った作品である。ここでは、蘇州の太湖を、かつて従軍のために訪れた湖南省の水系に対比して詠じている。これに対応するように、趙翼が西南部の原生林を、中原の農耕地に対比して描いた。このように、趙翼は、広西の景色を媒介として、自らを蘇軾と查慎行の後継者として位置付けている。すなわち、彼は両者が描き尽くすことになかった未開の風土を題材とし、それを切り拓こうとしたのである。

趙翼の広西詩は、独特の題材を備えた作品群として、当時の中央官僚たちの間で吟味されていた。その具体的な

例として、乾隆四十二年（一七七七）に蔣士銓が、趙翼の編修を終えながらも未刊であった『甌北集』二十二卷本に寄せた序文（蔣士銓『甌北集序』、『甌北集』附録三「序跋」）が挙げられる。

吾友趙甌北觀察自黔中解官帰、閑居奉母。以其暇裏輯生平所為詩約二千首、將付梓、郵寄示余、屬為其序。嗚呼。君可伝者不止此、而天下後世苟容其言尚論、舍是亦無以相見。：（中略）：然君詩則自出都後益工。蓋天才踔厲、其所固然。而又得江山戎馬之助、以發抒其奇。當夫乘輅問俗、停鞭覽古、興酣落筆、百怪奔集、故雄麗奇恣、不可逼視。雖欲不伝、不得也。（吾が友趙甌北觀察黔中より官を解きて帰り、閑居して母を奉ず。其の暇を以て生平為る所の詩を裏輯し、約二千首あり、將に梓に付せんとし、郵寄し余に示し、屬し其の序を為らしむ。ああ。君伝ふべき者此に止まらず、而うして天下後世苟も其の言を咨ねて尚論せば、是れを捨てて亦た以て相見る無し。：（中略）：然れども君の詩則ち都を出づる後より益々工なり。蓋し天才踔厲、其れ固より然る所なり。而うして又た江山戎馬の助けを得、以て其の奇を發抒す。夫れ輅を乗り俗を問ひ、鞭を停めて古を覽るに当たり、興酣にして筆落ち、百怪奔集す。故に雄麗奇恣、逼視すべからず。伝はらざらんと欲すと雖も、得ざるなり。）

ここで引用された部分には、趙翼の出仕の履歴は省略する。蔣士銓は、乾隆十九年に趙翼とともに明通榜に合格して内閣中書に任じられ、その後も相次いで翰林院に選拔された。「大集之序不以他属而以属余、蓋以酸鹹之嗜、兩人有同氷焉（大集の序、他を以て属せずして以て余に属するは、蓋し以へらく酸鹹の嗜、兩人焉に同氷有り、と）」（蔣「序」、同前）と述べたように、蔣士銓は作詩において趙翼と意気投合であった。蔣士銓にとつて、趙翼の広西を含む西南部の風土に触発された詩作こそ、彼の最も優れた作品群であった。具体的には、「輅を乗り俗を問ふ」は、前述の「陽朔山」における「一々にして土諺に詢ぬる暇あらず」という一句と対応し、「陽朔山」のような作品を指す。また「鞭を停めて古を覽る」は、本稿では紙幅の都合から割愛したが、唐の南詔が割拠し唐王朝を防御するために築いた竜尾関を詠んだ「下関」（『甌北集』卷十四）や北宋の狄青が儂智高を掃討した古戰場を詠んだ「崑崙関詠古」（『甌北集』卷十三）などの作品が該当する。つまり、蔣士銓の評価は、趙翼の「生面を開く」という解釈と、彼の広西における創作活動とに対応している。この対応は、蔣士銓と趙翼がともに中央官僚として、遠隔地で未經

駿の土地を描こうとする、という共通意識によるものと考えられる。実は、王鳴盛の『甌北集』二十七卷本への序文と、錢大昕の『甌北集』三十三卷本への序文にも、蔣士銓の評価と同様の言説が見られる。⁽¹⁾

四、袁枚の「生面を開く」への解釈について

さて、袁枚の「謝趙耘菘觀察見訪湖上兼題其所著甌北集二首」其一を見よう。

集如金海自雕搜 滿紙風雷筆未休 集 金海の如く自ら雕搜し、滿紙 風雷 筆未だ休まず。

生面果然開一代 古人原不占千秋 生面を果然として一代に開き、古人原より千秋を占めず。

交非同調情難密 官到殘棋局可收 交はり 同調に非ずんば情密き難く、官 殘棋に到れば局を收むべし。

我倘渡江双槳便 定來甌北捉閑鷗 我倘し江を渡り双槳便くんば、定めて甌北に來たり閑鷗を捉ふ。

この題詩は、前述の蔣士銓序から二年後の乾隆四十四年に作られたものである。作品の背景として、同年正月、袁枚は南京を発ち杭州に向かい、二月以降は西湖に滞在した。同二月、趙翼は母の喪服を脱ぎ、家計の事情により浙江に赴いた。その際、西湖で袁枚と会面し、自らの新刊『甌北集』二十四卷を呈上した。したがって、「生面を果然として一代に開く」という一句は、趙翼の広西詩のみならず『甌北集』全体への評価である。一方、この一句は、袁枚の女弟子である席佩蘭が、袁枚の誕生日を祝うために作った寿詩「寿簡齋先生」（『長真閣詩集』卷三、光緒強氏南翠草廬本）から採られたものである。同詩では袁枚の作詩について、「風神漫擬逼香山、標格応參陶杜間。生面果然開一代、新声奚止付双鬢（風神漫ろに香山に逼むるに擬し、標格応に陶杜の間に參るべし。生面を果然として一代に開き、新声奚ぞ止だ双鬢に付するのみならんや）」と論じられている。これは、袁枚の作詩の精神が白居易に近く、品格が陶淵明と杜甫を兼ね、更に自らの個性が一世を風靡し、その新作が周囲の女弟子だけではなく世の中にも広まっていたと、席佩蘭は袁枚を当代随一の詩人として崇めている。

また、この作品の末尾の「六句万首莫誇多（六句に万首あるも多きを誇るなかれ）」という一句から、「寿簡齋先生」は袁枚が六十歳の乾隆四十年（一七七五）に作られたと比定される。すなわち、袁枚の『甌北集』への題詩の

四年前にあたる。袁枚は、かつて庶吉士として翰林院で学んだ経験があるため、趙翼の広西詩に与えられた中央官僚たちの共通意識を見落とすことはなかった。すると、この一語に対して、袁枚が蔣士銓の序文と同じ解釈を取らず、席佩蘭の寿詩から表現を取ったことには、深い意味があると考えられる。先述の通り、「生面を果然として一代に開く」という一句は、席佩蘭が袁枚を当代随一の詩人として讃えた寿詩に見られた用例である。袁枚がこの一句を趙翼に贈ったという行為には、趙翼を自分と同格の詩人と見做す意味が含まれている。

とはいえ、袁枚の標榜は条件付きであり、その点も彼の題詩の中に読み取れる。前掲の題詩の中の、「交はり同調に非ずんば情密き難し」という一句は、杜甫「徒步帰行」に見える「論交何必先同調（交を論ずる何ぞ必ずしも同調を先にせん）」（杜甫詳注）巻五）を根拠した。杜甫の詩は、貧しく低い身分の自分と、武勲を立て栄達した李嗣業との間に、大きな身分差があっても、心のふれあいこそ重要であると述べた。これに対して、袁枚は、身分が異なれば情誼も長続きしないと強調した。さらに、もし趙翼が引退すれば、自ら揚子江を渡って常州に住む彼を訪れようと快諾した。つまり、在野の郷紳となった袁枚は、趙翼の引退を前提として、彼を自分と同格の詩人として長く扱い続けるのである。実際、趙翼は、同年九月、病を理由に補任を辞退し、ついに在野の郷紳となった。

ここで示された、袁枚と趙翼の身分上の衝突は、「生面を開く」という一語の解釈に関わるものである。先述の通り、中央官僚たちは「生面を開く」を用いた際に、未知の土地への好奇心に基づき、概ね趙翼の広西詩を対象としていた。彼らの嗜好に対して、袁枚は明確に反対の立場を示した。この点は、乾隆五十年（一七八五）、袁枚が『甌北集』二十七巻のために書いた序文（袁枚『甌北集序』、『甌北集』附録三「序跋」）に裏付けられる。

今夫越女之論劍術曰、妾非受於人也、而忽自有之。夫自有之者、非人与之、天与之也。天之所与、豈独越女哉。：（中略）：耘菘之於詩、目之所寓、即書矣。心之所之、即録矣。：（中略）：余之為耘菘言者、亦止此而已矣。或謂耘菘從征滇徼、官海南、黔中、得江山助、故能以詩豪。余謂不然。世之行万里、歷險艱者、或十倍焉、而無加於詩如故也。（今夫れ越女の劍術を論ずるに曰はく、妾人より受くるに非ざるなり、而うして忽ち自ら之を有す。夫れ自ら之を有するは、人之に与ふるに非ず、天之に与ふる所、豈に独り越女ならんや。：（中略）：耘菘の詩に於けるや、目の寓する所、即ち書す。心の之く所、即ち録す。：（中略）

…余の耘菘の為に言ふは、亦た此に止まるのみ。或ひと謂はく、耘菘溟徼に従征せられ、海南と黔中とに官せられ、江山の助けを得、故に能く詩を以て豪る、と。余謂はく、然らず。世の万里を行き、險艱を歴る者、或いは十倍するなり、而るに詩に加ふるなきことは故の如きなり。

ここで引用された部分には、袁枚が論述を敷衍した部分は省略する。そして、袁枚の核心的なイメージである越女は、『呉越春秋』（江蘇古籍出版社、一九八六年）巻五を出典とし、絶世の剣術で越王に宮廷まで招かれ、その途次で翁に化けた猿と出会い、これを撃破した。袁枚は、越女の剣術が自然に身につけられたものであると論じたのと同様に、趙翼の作詩も、後天的な影響を受けず、自然に身につけられたものであると述べている。さらに袁枚は、趙翼が「江山の助け」を得て作詩を誇っているという見解を批判している。「江山の助けを得」という表現は、明らかに蔣士銓の序文における「江山戎馬の助け」と重なるが、蔣士銓の名は言及されていない。これは、袁枚が蔣士銓一人を批判したのではなく、蔣士銓と同じ見解を持つ中央官僚たち全体を批判する意図があったと考えられる。したがって、この序文において、袁枚は、「性靈説」という文学論を展開するのみならず、趙翼の官僚という身分およびそれに伴う創作の場を消去し、趙翼を純粹かつ「性靈派」の詩人として描いているのである。先述の通り、これまで趙翼の作品を「生面を開く」と評価していたのは、すべて彼の同僚であり、創作の場も同僚たちによって構成されていた。趙翼を「性靈派」の詩人として扱うことは、本来不可能であった。しかし、趙翼の官僚から純粹な詩人への身分転換は、趙翼の退官という事実を前提としているが、詩壇に及ぼした影響は、袁枚が意識的に創出したものであると考えられる。この点について、次章で検討する。

五、趙翼の身分転換と「性靈派」の成立について

ここで、話を乾隆三十八年（一七七三）に遡る。先述の通り、同年、趙翼は「乞養」を申請し、故郷の常州に帰って町の郊外で在野の生活を送り始めた。しかし、仕官の道から身を引いたことにより、趙翼は創作の場を失った。乾隆四十年（一七七五）に作られた「編詩」（『甌北集』巻二十二）には、「欧陽昔作文、喜共師魯批（欧陽昔文を作

り、喜びて師魯と共に批す）、「我今無此友、將欲索解誰（我今此の友無く、將に誰かに索解せんと欲する）」と記され、彼の落莫の心情が描かれている。歐陽脩と伊洙は洛陽の錢惟演幕府の中で互いに文章を磨き合い、同人の謝絳や梅堯臣も集まった。趙翼にとつて、錢惟演幕府に相当するものは、北京の軍機処や翰林院などの官署であった。このような友との別れ、または創作の場の喪失は、「門任婦持使我懶、詩無人解向兒伝（門婦持ずるに任せ我こゝろをよて懶り、詩人解する無く兒に向ひて伝ふ）」（『漫興』六首其一、『甌北集』卷二十二）などの句にも表れている。すると、袁枚への接近は、趙翼が新たな創作の場を求める行動として理解できる。

乾隆四十三年（一七七八）に、趙翼は『甌北集』二十二巻を二十四まで増補・刊行した。この増補された二巻の中には、「題袁子才小倉山房集」二首（『甌北集』卷二十三）、「再題小倉山房集」（同巻）、「小倉山房集中有詠物九首戲用其韻」（同巻）など、袁枚に関係する作品が集中されている。特に「題袁子才小倉山房集」其一には、「作宦不曾逾十年、及身早自定千秋（宦と作ること曾て十年を逾えず、身に及ぶこと早に自ら千秋に定む）」とあり、袁枚が在野にありながら、その詩歌が不朽であることを表彰している。これらの作品は、乾隆四十四年に、趙翼が袁枚を訪問する前の準備であつたと考えられる。近年の袁枚研究では、乾隆四十三年から乾隆四十六までの三年間は、袁枚が『隨園詩話』を編集するうえで、重要な草案段階であつたと指摘されている。袁枚自身も、杭州滞在中に、「余在杭州、杭人知作詩話、争以詩來、求摘句者、無慮百首（余杭州に在り、杭人詩話を作るを知り、争ひて詩を以て來たり、摘句を求むるは、無慮百首あり）」（『隨園詩話』卷六、『袁枚全集新編』所収、浙江古籍出版社、二〇一八年）と記し、その盛況ぶりを誇っている。趙翼の訪問もこの盛況の一例であつた。

袁枚と会面した趙翼は、袁枚による「生面果然」として一代に開く」という表彰を受け、まもなく江南地域にその名を知られるようになった。乾隆四十九年（一七八四）、趙翼は兩淮鹽使の全徳に招かれ、揚州の安定書院において講座を開いた。その際、文人の范起鳳から献上された贈詩（范起鳳「范瘦生枉訪並投佳什次韻奉答」原作、『甌北集』卷二十八）には、次のように、「生面を開く」という表現が見られる。

公身原是玉堂仙 上苑探花旧著鞭 公の身 原より是れ玉堂の仙、上苑に花を探り 旧より鞭を著く。

生面独開千秋下 大名群仰廿年前 生面を独り千秋の下に開き、大名は群れに廿年前より仰がる。

文学史からみる清代「性靈派」の成立

范起鳳は、沈徳潜の高弟であり、科挙に挫折した後、晩年は揚州府の府立学校で教鞭を執った。¹⁵一方で、彼は袁枚を崇め、袁枚に対する悪口を聞くと、不平を感じそれを袁枚に伝えることもあった。¹⁶つまり、彼は江南地域の下層知識人の立場にあった。その「生面を独り千秋の下に開く」という表現も、袁枚の「生面を果然として一代に開く」を踏襲したと考えられる。すなわち、范起鳳の趙翼に対する評価は、袁枚を媒介にしたものである。

次に、乾隆五十一年（一七八六）、文人の吳蔚光が趙翼を訪れ、その贈詩（「次韻答吳竹橋別後見寄之作」原作、『甌北集』巻三十）にも、「独開生面奇劉嶂、直抒中懷快瀉川（独り生面を開くは奇しく劉らるる嶂、直ちに中懷を抒ぶるは快く瀉する川）」とあり、「生面を開く」という一語が見られる。吳蔚光は、蘇州府昭文県出身で、乾隆四十五年に進士及第し、庶吉士に抜擢されたが、履修終了後、翰林院に残ることができず、礼部主事に転任された。その後間もなく病休で帰郷し、音楽と遊覧の生活を送った。¹⁷よって、吳蔚光は江南地域の裕福層文人の立場にあった。また前述の袁枚の杭州滞在期において、吳蔚光も訪問者の一人であった。¹⁸彼の「独り生面を開くは奇しく劉らるる嶂」という表現は、趙翼の作品が奇抜な山のように個性を有していることを意味する。なぜなら、その対句は、趙翼の作品が迸る川のように胸中の思いを伝えていることを評価している。したがって、吳蔚光の「生面を開く」という表現も、袁枚の用例に倣ったものであり、彼も袁枚を媒介として趙翼の詩歌を評価したことがわかる。

さらに、乾隆五十七年（一七九二）、増刻された『随園詩話』補遺巻五には、秀才の吳楷が、揚州の書院で袁枚が趙翼に題した「生面を果然として一代に開く」を、趙翼が袁枚に贈った「身に及ぶこと早に自ら千秋に定む」に對させ、一聯をなして趙翼に贈ったことが記載されている。ここに言及された秀才の吳楷は、『淮海英靈集』に記載される邑諸生の吳楷と同一人物だと思われる。それは、秀才が明清時代において学校に在籍してまだ郷試に合格していない人を指すためである。すると、吳楷は、揚州府所轄の儀徴県出身で、諸生のまま生涯を終えた。¹⁹よって、吳楷は、范起鳳と同様に、江南地域の下層知識人であり、かつて沈徳潜と錢陳群がその序文を書いた。²⁰よって、吳楷は、范起鳳と同様に、吳楷が趙翼を評価する際にも、袁枚の影響が介在していた。

上述の通り、引退によって創作の場を失った元中央官僚の趙翼は、袁枚の推挙を介して、これまで親しみの薄かつ

た江南地域の詩壇に位置づけられた。特に、袁枚が女弟子から自らに贈られた「生面を果然として一代に開く」という一句で趙翼を評価したことは、趙翼が自らの作詩における同士且つ同格者であるというイメージを、江南地域の文人たちに印象付け、趙翼も「性靈派」の詩人として知られるようになった。「性靈派」に、袁枚以外の有力な詩人が加わったのも、この評価が契機であった。清中期詩歌史においては、「性靈派」を論ずる際に、趙翼が袁枚に次ぐ第二の詩人として位置づけられたのも、袁枚の「生面を開く」という評価が縁起となったためである。よって、「性靈派」の成立は、①袁枚による「性靈説」の提唱、②中央官僚出身の趙翼の身分転換、③下層知識人による干謁活動、という三方向の要素が総合的に作用して実現したものである。特に、中央官僚の身分転換や下層知識人の干謁活動は、これまでの文学史研究において関心が薄かった領域であり、今後も検討を進めたい。

注

- (1) 嚴迪昌『清詩史』(五南圖書出版有限公司、一九九八年)、同氏の未刊稿「和而不同」之乾隆「三大家」(『清代文学史案』所収、上海古籍出版社、二〇二四年)、邱紅「乾隆三大家」説在江南地区的産生、伝播与異議」(『古代文学理論研究』二〇二二年第二期)などを参照。
- (2) 「袁於趙亦神交久矣、一旦相見即意氣相投、生面果然開一代、古人原不占千秋。則對趙氏之獨創精神欽佩不已」、王英志『性靈派研究』(遼寧大学出版社、一九九八年)、二一〇頁を参照。
- (3) 「趙翼の詩歌抒写性靈、自由独创、這種創作精神則与袁枚完全一致、也与他自身的理論觀點正相吻合、誠如袁枚謝趙耘菘觀察見訪湖上、兼題其所著甌北集二首之二所云、生面果然開一代、古人原不占千秋」、朱則傑『清詩史』(江蘇古籍出版社、一九九二年)、二八三頁を参照。
- (4) 趙翼の生涯は、陳清雲『趙翼年譜新編』(上海世紀出版集團、二〇一六年)、袁枚の生涯は、鄭幸『袁枚年譜新編』(上海世紀出版集團、二〇一一年)を参照。
- (5) 高崇蘭『集千家註批點杜工部詩集』(八木書店、一九八一年)卷十一「丹青引」注を参照。

文学史からみる清代「性靈派」の成立

- (6) 張仲謀『清代文化与浙派詩』（東方出版社、一九九七年）を参照。
- (7) 王小恒「天津查氏の遭際、心態及其水西荘の營建——以查為仁為中心」（『図書与情報』二〇一三年第五期）を参照。
- (8) 青木正児『清代文学評論史』（春秋社、一九六九年）第六章「蔣士銓（清容）と趙翼（甌北）」を参照。
- (9) 「猗花」と「鴉鳥」は、『甌北集』（上海古籍出版社、一九九七年）に「猗花」と「鴉鳥」となっている。『統修四庫全書』（上海古籍出版社、一九九五年）所収『甌北集』刻本によって改正す。
- (10) 「井西道人画不得、自有此山無此亭。」「敬業堂詩集」（上海古籍出版社、二〇一五年）卷三十九、一〇六三頁、又「朱彝尊」井西道人画不得、（查慎行）暖翠浮嵐如此濃。」、同前卷二十四、六四六頁を参照。
- (11) 「唐楊蓮曾到嶺外、見陽朔、荔浦山水、談不出口。俄而求選彼邑、挈家南去。」「敬業堂詩集」卷三十一を参照。
- (12) 王鳴盛「甌北集序」、「其出塞之作、境奇詩益奇、皆人耳目所未聞、目所未睹」、「甌北集」附録三、一四四一頁、又錢大昕「及乎出守辺郡、從軍演徽、觀察黔西、簿書填委、目不暇給、而所作益奇而工。：（中略）：最崧崧所涉之境凡三麥、而每涉一境、即有一境之詩以副之。」、同前、一四四七頁を参照。
- (13) 王水照『北宋三大文人集團』（上海古籍出版社、二〇二一年）第一章「錢（惟演）幕僚佐集團」を参照。
- (14) 鄭幸「從稿本至刻本…『隨園詩話』的創作過程与文本變化」（『文獻』二〇二五年第三期）を参照。
- (15) 「以能詩名、為長洲沈文愨德潛高弟。從事幕府、大江南北。：（中略）：晚客教授李保泰揚州學署、以疾返吳中、尋卒。」、朱延射、潘履祥『光緒宝山県志』（上海書店、一九九一年）卷十を参照。
- (16) 「汪大紳道余詩似楊誠齋、范瘦生大不服、來告余。」、袁枚『隨園詩話』（袁枚全集新編）所収、浙江古籍出版社、二〇一八年）卷八を参照。
- (17) 「竹橋初登詞館、繼改儀曹、志尚幽閑、即辭華臚。：（中略）：且与門人鮑叔治等及女士席佩蘭、屈宛仙弦詩話画、粉墨淋漓。」、王昶『湖海詩伝』（上海古籍出版社、二〇一三年）卷三十六を参照。
- (18) 鄭幸『袁枚年譜新編』、四五三頁を参照。
- (19) 「吳楷、字一山、儀徵人、邑諸生。：（中略）：有含黛詩三卷、丹橘林詩二卷。長洲沈文愨、嘉興錢文端序之。」、阮元『淮海英靈集』（商務印書館、一九三五年）丁集卷三を参照。